



日本と中国における英語教育の特色と動向

王, 明潔

(Citation)

教育科学論集, 18:37-41

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009157>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009157>



〈研修報告〉

日本と中国における英語教育の特色と動向

—Characteristics and tendency of English education in Japan and China—

王 明潔

Wang Mingjie

(中国江蘇省蘇州第十中等学校／文部科学省教員研修留学生)

キーワード：英語教育 English education、英語学習 English learning、英語力 English capability

はじめに

英語は現在、世界の共通語と言っても過言ではない。矢野（2004）は、「英語は国連をはじめとする国際的な政治、外交から船舶・航空管制、科学技術、書物や新聞・雑誌などの出版物、学会や企業の国際会議、国際ビジネス・貿易、多国籍企業、旅行や広告、音楽、スポーツなど、あらゆる分野にわたって主要言語として機能するようになった。実際、世界の科学技術や学問上の情報のほとんどは英語で発信されている」¹⁾と述べている。

さらに、世界中で進展しつつあるグローバル化とともに、英語教育が注目されている。太田（2013）が言うように、「グローバル化が加速する現代において、学校教育や英語教育の在り方について多角的に論じることは…世界の未来を考える上でも重要な試みである」²⁾。

こうした動向の中にあって、日本と中国の学校現場においては、ビジネス等の場で母語と全く違う言語を駆使して有効なコミュニケーションを行えるように教育しないといけないという、共通の課題がある。

筆者は、中国において高等学校の英語教員をしており、現在、文部科学省現職教員留学生として、2013年10月～2015年3月までの1年半にわたり、神戸大学で日本の教育について理論的かつ実践的に学んでいる。また、日本の英語教育の実践を直接に観察し、実践の内実について具体的に理解することができた。

本稿では、教員の視点から、日本と中国の英語教育の共通性と特色に着目しつつ、日本と中国でどのように英語教育が行われているのか整理する上で、両国における今後の英語教育の動向を考察したい。

第一章 英語教育の共通の背景

1. 母語の影響

日本は、中国同様に、漢字文化圏であり、アルファベットを使う英語との相違が大きい。例えば、両国で使う漢字はそれ自体意味を持ち、数も多いが、英語はインド・ヨーロッパ語族であり、ローマ字で書き、ローマ字自体に意味はなく、数も少ない。また日本語では、動詞が文章の最後になり、英語では、動詞は主語の後になるよう

に語順も違う。一方、中国語では時制があまりないが、英語では少なくとも十二の時制がある。このように、日本語や中国語と英語は大きく異なるため、日本人や中国人にとって英語を学ぶのはかなり難しい。

2. 文化の影響

語学学習は、言語の違いだけではなく、生活環境や文化とも関係がある。生徒たちは自覚してはいないが、実際は自分たちの文化や価値観をベースに、外国語を勉強しているのだ(Watson, K. & Agawa, G. 2014)。例えば、日本と中国社会では、人間関係を非常に大事にする。日本語では、「思いやり」とか「空気を読む」という言葉がよく使われる。中国語にも、「察言観色」がある。どちらも、自分だけでなく、ほかの人の気持ちを考えないといけないという意味である。

一般に、東洋人は自己主張が苦手だとされている。例えば、水野（2008）は、「教室の授業でディスカッションやディベートなどの言語活動が非常にやりづらい」³⁾と述べている。これらは、ほかの人にどう評価されるかを気にするからだとも言える。このような心理的なプレッシャーを持ちながら、人前で自分の意見を喋り、口を大きく開け、大げさな口調をするのは、特に日本人や中国人には、とても勇気が要る。しかし、それらは英語の特色であり、高い英語力を持つためには慣れないといけない。

3. 英語を学ぶ動機

加えて、普通の日本人と中国人にとって、日常生活で英語を使う機会は少ない。小林（2013）は、英語について、「日本の場合は、多くの場合『あれば便利』さえも感じられず、『なくても生活できる』のだ」⁴⁾と指摘している。日本人は、英語を使えなくても支障なく生活できる。では、勉強の動機は何かと言えば、テストでいい点数をとることである。それを考えると、難しい英語を勉強したくない生徒たちの気持ちも理解できる。そして日本のみならず中国の英語教育においても、生徒たちの学ぶ動機が受動的になる状況が起こりやすい。

以上のように、日中の英語教育の現状を見ると、多くの共通点が見られる。

第二章 両国の英語教育の特色

1. 英語教育の目標と科目

日本、中国の両国とも、中央政府の教育機関が責任をもって、高校卒業までの英語教育の目標を規定し、教科書の基準を公布し、教員の研修を行い、そしてテストによって生徒の英語力を評価する。具体的に両国の規定を見てみよう。

【日 本】

日本の場合は責任官庁は文部科学省であり、小学校から高校までの教育目標は、学習指導要領で次のように定められている（文部科学省 2008a；2008b；2009）⁵⁾。

	目標
小学校	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。
中学校	初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。
高校	英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

そして、教育目標を達成するために、具体的な科目と標準単位数も規定している。例えば、日本の高校の英語の標準単位数は次のようになっている（文部科学省 2009）⁶⁾。

科目	標準単位数
コミュニケーション英語基礎	2
コミュニケーション英語Ⅰ	3
コミュニケーション英語Ⅱ	4
コミュニケーション英語Ⅲ	4
英語表現Ⅰ	2
英語表現Ⅱ	4
英語会話	2

【中 国】

一方、中国の該当の教育機関は教育部であり、小学校から高校までの目標は、課程標準により次のように規定されている（教育部 2011a；2011b；2013）⁷⁾。

	目標
小学校	英語について興味を起こし、自信を持ち、いい習慣を身に付け、基礎的な知識とスキルを学ぶ。英語の勉強を通じて、観察、記憶、考え方、想像の能力を発展し、文化の違いを感じ、健康的な人生観を形成しはじめ、今後の発展を目指す。

中学校	英語についての技能、知識、愛情、学び方、文化の意識を基礎としての初歩的な総合能力を養い、生徒の全面的な成長を目指す。
高校	自発的な勉強と協力勉強の能力を発展し、有効的な学び方を形成し、総合的な英語力を高める。

そして、中国の高校の英語の標準単位数は次のようになっている（教育部 2013）⁸⁾。

レベル	必修科目			選択科目				
	科目	週授業数	単位	順番履修			自由履修	
				科目	週授業数	単位	言語と技能類	言語応用類 鑑賞類
9級 ↑ 8級 ↑ 7級 ↑ 6級 ↑				英語 11	4	2		
				英語 10	4	2		
				英語 9	4	2		
				英語 8	4	2		
				英語 7	4	2		
				英語 6	4	2		
	英語 5	4	2					
	英語 4	4	2					
	英語 3	4	2					
	英語 2	4	2					
	英語 1	4	2					
義務教育 1-5 級								

一科目が週4時間でありながら、2単位しかない理由は、各科目が半学期で終わるためである。日本ではGTECのCan-doリストがあり、生徒の英語学習の発展は、7段階に分けてそれぞれの英語力が規定される。中国も、同じように1級から9級までに分けられている。

単位数で見ると、高校の場合、日本は21、中国は22であり、あまり変わらない。けれども、目標と科目で細かく見ていくと相違がある。これについて太田（2013）次のように指摘している。「日本の英語教育の目標が、異文化理解やコミュニケーション能力の育成、4技能（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング）のバランスの取れた育成を主たるねらいとしているのに対して、中国の英語教育は、知識・技能の習得のみならず、学習ストラテジーや感情態度についても具体的に育成することが目標として掲げられており、これらは小学校段階から一貫して指導が行われるものとされている」⁹⁾。

日本の英語教育は英語の中の4つの技能を深めつつ、英語を媒介にして日本の文化とは異なる文化などを学び、英語力を上げることを目指している。一方、中国では、英語教育の中で、英語の知識・技能を深めることがねらいにあるが、英語を通して様々な学習の方法や感情面の豊かさを深めることが課程標準に記載されている。教育の目標は人として身体、知識、能力、価値観などの全面的な成長を促すことである。科目を教えることはこうした目標を達成する為の手段である。

2. 教育現場の特色

上述したように、日中両国の英語教育の目標が違うこ

とから、教育現場もそれぞれ異なる特徴をもっている。筆者は、日本での研修期間中に、小学校の外国語活動、および中学・高校の各学年の英語の授業を見学する機会をえた。そこで日本の英語教育の優れた点を学んだ。それと共に中国の英語教育の特色も再確認できた。それでは、具体的に日本と中国の英語教育の現場ではどのような特徴がみられるだろうか。

【日 本】

日本の英語教育は生徒達の英語力を上げるために、いろいろ工夫し、より効率よい方法を求める。従って、教育の実践は、次の特色を持っている。

第一に、協同学習という集団活動をうまく活用していることである。見学した授業では、ペアワークやグループワークの協同学習を行っていた。生徒たちはお互いに助け合い、クラスの前に出て発表する準備など、一人一人が自分の役割を担って、効率のよい活動を展開していた。一斉授業の場合では、授業時間数を生徒人数で単純に割ると、生徒一人の持ち時間はわずか1～2分に過ぎない。それでは、言語学習においてかなり発話が足りないと感じる。協同学習を導入すると、練習時間が増え、助け合いができ、本格的なコミュニケーションも行うことができる。事前に生徒一人一人の役割を明確にしておけば、協同学習における教師の監督不足という欠点を乗り越えて、有効な練習を保障することもできる。

第二に、生徒中心の授業を行っていることである。授業は、生徒の成長が目的でもある。つまり、生徒が主人公で、教師は生徒を助け支援する人である。日本の教師はいつもこうした姿勢に立っている。教師が準備してきた内容を一方的に終わらせるというのではなく、生徒にたっぷり時間をあげて、一つ一つの内容を丁寧に進めている。たとえ公開授業であっても、生徒がもっと時間が欲しいと申し出れば、即座に授業計画を見直すこともある。また、子どもの年齢や能力に応じて、一步一步着実に成長させようとしている。

第三に、教師が新しい理論や技術を、自覚的かつ熱心に身に付けようとしていることである。以前は日本の英語教育は文法を重視していたとされている。藤田(2013)は、「一般的には文法訳読法が主流である」¹⁰⁾と述べている。また、Underwood, P. R. & Takahiko, H. (2010)によれば、日本では文法を強調しすぎており、リーディング教育は停滞していたと言う。確かにそういった時代もあったが、今はコミュニケーション能力の発展も重視されている。高等学校学習指導要領の外国語編(2009)では、『聞くこと』、『話すこと』、『読むこと』及び『書くこと』の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る。また、コミュニケーションを内容的に充実したものとするができるよう、指導すべき語数を充実する。」とされている。したがって、これらの技能向上のために、教師たちは従来通りの考え

方や教え方を変えようと努力している。協同学習を利用したり、なるべく英語で授業を行ったりしている。この点については、大学における教員養成科目「教職実践演習」の中で、現役の先生が教員になる学生に、従来通りの教え方ではなく、コミュニケーション能力を形成することを強調していた。よりよい教育方法を求め、自分が慣れていたことを変える営みは、高く評価されよう。

【中 国】

中国の場合は、人としての全面的な成長をめざし、「因材施教」という教育原則があり、「教無定法」という観点に立って、教育において多様性がある。このことは、万能な教育方法はなく、生徒の能力や個性に応じ、教育内容と教員自分の特徴と併せて、適切な方法を選ぶということを意味している。そして、一つ一つの科目における教育目標は、独自の意義を持ちながらそれぞれ関連し合い、生徒たちの教育が行われていく。

従って、教育の実践における多様性は保障されている。南部(2012)は、『課程標準』として規定され、より柔軟な教育課程の編成が可能となっている、「地方、学校、教師がそれぞれ実際の状況に適切に対応することで、教育の多様なあり方が生まれる余地が大きく存在しているのである」¹¹⁾と述べている。

教育現場では、生徒の全面的な成長を目指し、教育の多様性を保証しようと努めている。同じ内容でも、教える方法は生徒や教師によって異なる。それゆえ様々な実践のテーマに関する教師主体の研究会を開くことが多い。そして、英語科においても、ほかの科目と同様、教師も、自分の担当科目の知識や技能を教えるだけではなく、生徒の抱える問題に対応したり、悩みの相談に乗ったり、様々な指導をしている。大多数の教師は朝から晩まで学校に居て、その上で休憩や昼休みの時間を割いて個別指導をする。そして平日は教師がずっと生徒の傍におり、なおかつ保護者と連絡も取り合っているので、生徒の学習や生活の状態は把握できている。従って、学校の中で適切な指導が行うことができる。すなわち、多様な指導は中国の英語教育、あるいは中国の教育全体の特色だと言ってよい。

以上より、両国とも教育目標に従い、特色を活かしながら実践している。日本では、教育研究の成果を基礎として、教師方々は熱心に新しい理論や方法を実践し、生徒達を教育の主人公として、彼らの英語力を上げる為に工夫している。中国では、教育の多様性を強調し、状況により適切な方法を従い、生徒達の全面的な成長を目指している。

第三章 今後の動向

日中の英語教育は共通する背景と各自の特色を持っているが、これからどういう方向に向かっていくのかを、最後に考えてみたい。

1. グローバル化へのさらなる対応

日本では、特に東京オリンピックに向かって、グローバル化の拡充が重要視されている。文部科学省は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(以下、「計

画」という)を作って、今後の英語教育の発展方向を以下のように描いている。すなわち、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。2020年(平成32年)の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、新たな英語教育が本格展開できるように、本計画に基づき体制整備等を含め2014年度から逐次改革を推進する。」としている。

「計画」により、具体的な体制整備においては、概ねに二つの内容を指摘している。それは、①教材の開発と②教員の指導力の向上である。そして、教員の指導力の向上のために、教員養成、海外留学、ALT配置などの改善充実を目指すという。

一方、中国でも、同様に、グローバル化への関心は高い(張麗萍, 2008)。教育政策で、英語教育は国民教育の基本内容になる(陳国華, 2008)。具体的には、「外籍專家」として外国から専門の教員を招致して、生徒たちに英語を教えることである。そして、教員自身の英語力の向上も、効率良い英語教育の大前提と認識されており、教員研修を通して教員の指導力を高めていこうとしている。

2. 互いの共通点と相違点を深く理解した上での国際交流
グローバル人材とは、単に英語力が高い人を指す用語ではない。

日本では、グローバル人材育成の「計画」において、「日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実について…国の歴史、伝統文化、国語に関する教育を推進」を求めている。国語科の授業時数を増加し、古典に関する指導を重視して、文学教材・言語活動・伝統文化に関する学習内容と歴史学習の充実を目指している。

一方、中国でも「国学」という言葉がよく言われ、重視されてきている。現に、子どもの時から「三字経」や「弟子規」、「唐詩」を勉強させる親が多くなっている。日本の大学入試センター試験にあたる中国の「高考」でも、「国語」の割合が大きくなっている。

自国の文化をしっかり学び、理解した上で、外国語を通して、相手の文化も理解できるように工夫していく。お互いの共通点と相違点を深く理解することを基礎として、国際交流を行うことが大事だと思う。

3. 教育方法の検討

日中両国の英語教育の実践においては、それぞれ特色を持ちながら実践され、グローバル人材育成を目指そうとしている。そこでは、誤解なくコミュニケーションでできる英語力を養うことが両国における共通の課題といえる。この課題を解決するために、今後の英語教育で重要な三つの視点を提案したい。

第一に、教師の理念として、生徒を教育の主人公としてとらえることである。そもそもグローバル化が進むにつれ、外国の情報や文化などを自主的に深く理解し、ほかの国の人と積極的にコミュニケーションをすることが不可欠になる。それゆえグローバル人材を育てる為には、

生徒自身が英語を用いる主人公としての自覚を養い、教師は生徒の成長を助ける役割という立場を重視する必要がある。

第二に、英語教育の研究を深めていくことである。日本と中国の人々は、英語に対して未だ十分には自信がない。大部分の人が欧米人に対応する時は緊張し、言いにくいことを英語で十分に表すことが難しいと感じている。このことから、英語教育の研究者は英語力を高め、自信を深めるために効率のよい方法や理論を研究し、できるだけ多様な選択肢を教師に提供することが求められる。

第三に、生徒に応じて適切な指導方法を選び、実践していくことである。生徒達は一人一人抱える問題、悩みや持ち個性が違う。従って、実際に生徒を指導していく教師は、積極的に新しい理論や方法を身に付け、生徒それぞれの個性や能力に応じて、可能な範囲で適切な方法を選択していくことが必須である。

おわりに

グローバル化の進展が目指されている今日において、日本と中国では、ともに英語教育の向上に力を注いでいる。そして、日本では、協同学習を加味した生徒中心の教育、また中国では、多様な指導を伴った全面的な成長のための教育というように各々の良さを活かしながら英語教育は展開されつつある。具体的手法を考案することを今後の課題としたい。同時に、自国の母語や文化を理解した上で、互いの共通点と相違点を踏まえて有効な国際交流ができるグローバル人材を育てていくことが目標課題となるであろう。

Abstract:

Presently, English serves as a global language in international communication. However, the native languages in Japan and China are far from English. In the trend of globalization, English teaching, therefore, has been a common topic in the field of education in both countries. We are going to discuss the common ground and distinctive features of English teaching between the two countries, trying to find the development tendency and effective practice for English education in Japan and China.

《注》

- 1) 矢野安剛(2004)『『外国語としての英語』から『国際語としての英語』へ英語教育再考』『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第14号, p.180
- 2) 太田かおり(2013)「中国における教育政策の動向：中国学校教育視察の記録および教育に関する一考察」『社会文化研究所紀要』第71号, p.1
- 3) 水野晴光(2008)「日本人の特性を活かす英語の習得法」『神奈川大学心理・教育研究論集』第27号, p.30
- 4) 小林ひろみ(2013)「英作文で何を狙うのか」JACET

- 関東支部『月例研究会記録』第9号, p.92
- 5) 文部科学省 (2008a) 「小学校学習指導要領解説」;
文部科学省 (2008b) 「中学校学習指導要領解説外国語編」;
文部科学省 (2009) 「高等学校学習指導要領解説外国語編」
 - 6) 文部科学省 (2009) 「高等学校学習指導要領解説外国語編」
 - 7) 教育部(2011a) 「基礎教育小学校英語新課程標準」;
教育部(2011b) 「初中英語新課程標準」;
教育部(2013) 「高中英語新課程標準」をもとに、筆者が翻訳した。
 - 8) 教育部(2013) 「高中英語新課程標準」をもとに、筆者が翻訳した。
 - 9) 太田かおり (2013) 「中国における教育政策の動向：中国学校教育視察の記録および教育に関する一考察」『社会文化研究所紀要』第71号, pp.22-23
 - 10) 藤田賢 (2013) 「高校英語授業における『ラウンド制指導法』と『文法訳読法』による効果の比較(実践報告, 全国英語教育学会第38回(愛知)大会)」『中部地区英語教育学会紀要』第42号, p.270
 - 11) 南部広孝 (2012) 「文革後中国における才能教育の展開」日本比較教育学会『比較教育学研究』東信堂, p.55
- 《文献一覧》(日本語、中国語、英語、URLの順に区分して、アルファベット順に並べる)
- 藤田賢 (2013) 高校英語授業における「ラウンド制指導法」と「文法訳読法」による効果の比較(実践報告, 全国英語教育学会第38回(愛知)大会): 中部地区英語教育学会紀要 (42), pp.269-274
- 小林ひろみ (2013) 英作文で何を狙うのか:
JACET-KANTO journal (9), pp.91-94
- 宮本由美子 (2013) 高校生の英語運用能力テストとCan-do得点との関係: Can-do Statements作成のための考察(実践報告・調査報告, 中部地区英語教育学会第42回(岐阜)大会): 中部地区英語教育学会紀要 42, pp.211-218
- 水野晴光 (2008) 日本人の特性を活かす英語の習得法:
神奈川大学心理・教育研究論集 27, pp.29-49
- 文部科学省 (2008a) 小学校学習指導要領解説
文部科学省 (2008b) 中学校学習指導要領解説 外国語編
文部科学省 (2009) 高等学校学習指導要領解説 外国語編
南部広孝 (2012) 文革後中国における才能教育の展開:
日本比較教育学会 比較教育学研究 東信堂,
pp.52-65
- 太田かおり (2013) 中国における教育政策の動向: 中国学校教育視察の記録および教育に関する一考察: 社会文化研究所紀要 71, pp.1-30
- 矢野安剛 (2004) 「外国語としての英語」から「国際語としての英語」へ英語教育再考: 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 14, pp.179-195
- 陳国華 (2008) 關於我国英語教育現狀和政策的分析和建議: 中国外語 22, pp.4-6, 14
- 教育部 (2008) 高中英語新課程標準 人民出版社
張麗萍 (2008) 日本英語教育現狀分析及其啓示: 高等函授學報 (哲學社會科學版) 21:6, pp.69-70, 73
Monk, B. & Takagi, K. (2014) Study Abroad at NUCB-A Decade of Success: NUCB journal of economics and information science 58(2), pp.207-229
Sybing, R (2014) Learner Preferences toward Native-speaker English in Japanese EFL Education: 東洋学園大学紀要 22, pp.211-227
Underwood, P. R.&Hattori, T. (2010) Developing Reading Fluency in Japanese Senior High Schools: Policy and Practice: 大妻女子大学紀要. 社会情報系, 社会情報学研究 19, pp.101-113
Watson, K. & Agawa, G (2014) Instructor Knowledge of Student Socialization, Classroom Culture and Social Mechanisms: NUCB journal of language culture and communication 15(2), pp.54-71
- 教育部 (2011a) 基礎教育小学校英語新課程標準
<http://wenku.baidu.com/view/9f0680d680eb6294dd886c1f.html> (閲覧日 2014年12月5日)
- 教育部 (2011b) 初中英語新課程標準
<http://www.jxteacher.com/jxncpanhui/column25753/03f5d664-31f5-444f-b386-913af503eaf1.html> (閲覧日 2014年12月5日)
- 文部科学省 (2013) グローバル化に対応した英語教育改革実施計画
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf (閲覧日 2014年12月7日)